

衆議院議員 (花粉症等対策議員連盟会長)

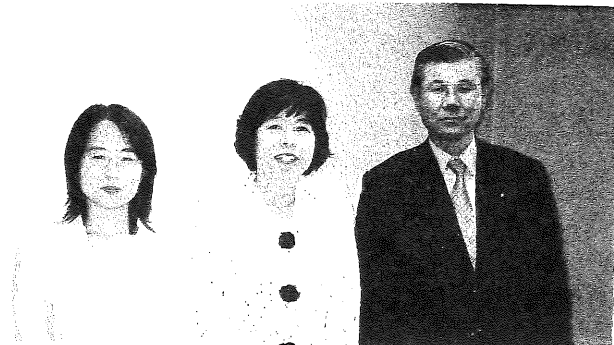
保利耕輔氏 (自治、文部大臣などを歴任) と会見

〈熊森〉

人工林が行き過ぎ

奥山造りには

クマが必要



〈保利氏〉

今から、林野庁長官に会いなさい

去年、花粉症等対策議員連盟（通称：ハクション議員連盟）なるものの存在を新聞で知った。わたしは、何としても会長の保利耕輔氏に会わねばならないと思った。自民党議員は自然保護団体に会ってくれないと聞いていたが、米田さんに頼んでアポを取ってもらった。前からわたしは、熊森の話は是非、責任与党である自民党の議員にこそ聞いていただきたい。会ってさえいただけたら、きっと理解してくださる方がおられるはずだと、確信していた。

ついに来たチャンス。約束は午後2時。何分とっていただけるのだろうか。5分？10分？その時間で勝負する。日本文明の運命がかかっているのだから。

議員会館に行くと秘書の方が出て来られて、「自民党応接室にお連れするよう言われています」と、応接室に案内してくださった。座っていると、保利議員が登場された。一目見るなり、まじめで謙虚な方だとわかった。

あいさつの後、瀬戸さんが話を切り出してくれた。議員がゆったりと話されるのを見て、森山「今日は、何分取っていただけるのでしょうか」

保利「1時間とってあります」（なんですって、1時間も。これは、ありがたい）

森山「花粉症等対策議員連盟の議員さんて、何人ぐらいおられるのですか」

保利「数十名です」

森山「保利さんも、花粉症ですか」

保利「そうです。その時期になると毎年、本当に大変です」

森山「ずっと不思議に思ってきたのですが、花粉症の方はどうして薬局とかに行って対症療法にばかりやっきになるのでしょうか。物事には何でも原因があります。

根本原因である膨大なスギの人工林の方を、どうかしようとなぜされないのですか。

もちろん、花粉症が起こるメカニズムには、諸説あってスギ花粉だけではなく排気ガスとかもかかわっているとか言われていることは承知しております。わたしたちもすべてわかっているわけではありませんが、少なくともスギ花粉が関係していることは間違いのないはずですよ」

保利「わたしたちもスギの人工林のことは調べています。ひどいことになっていますよ。ちょっと資料をもって来ますので待っていてください」（少しして）

保利「このアルバムを見てください。わたしたちが調べたのですが、スギ人工林の中は、1年中真っ暗で、大変荒れています。草1本生えていません。そのため雨の度に表土が流れ、岩がごろごろ。スギはあちこちで倒れています。すごいでしょ。わたしたち花粉症等対策議員連盟の議員たちは、この森を何とかしなければと考えているのです」

森山「いやあ、実はわたしたちも同じことを調べているのですよ。クマの絶滅を止めようという方から入ったのですがね」

保利「この森をどうかしないと、日本の水源が危なくなってくるのです」

森山「いやあ、わたしたちも同じところに行き着きましたよ。日本の水源がだめになるって」

保利「わたしは以前から、水源の問題に大変関心があって、取り組んできました。東京の玉川の水は、90%が都内を流れるようにしてあり、徹底的に高度利用されているのをご存じですか」

森山「そうなんですか。わたしたち都市に住む者にとって、水源は本当に大切です。水道から水が出なくなったら、都市は崩壊しますからね。それにしても、保利さんはどうして水源の問題に関心を持たれたのですか」

保利「議員になる前、5年ほど仕事でフランスに駐留していましたね。あちらではご存じのとおり、水道水は飲めません。お湯にしてみたらどうかと思って沸かしたのですが、白い粉がいっぱいできてお茶も飲めない。石灰分が含まれていますからね。それで、飲み水は買わねばなりません。箱に入った1ダースの容器に入った水を買って家に運び込むのが、家庭でのぼくの仕事でした。ヨーロッパに住んで初めて、いかに日本が水にめぐまれていたか知ったのです。あちらの連中が、『日本では飲める水をトイレに流していると聞いたけど、本当か』ってきいてくるのですよ。わたしたち日本人にとって何でもないことが、実は何とすごいことだったのか気づきました」



森山「日本の豊富な飲み水は、わたしたちの祖先が豊かな奥山には手をつずに、森を保全しておいてくれたおかげです」

保利「本当にそのとおりです。日本にいればそのありがたさに気づかないものです。フランスでは、シャワーを3日も使うと、めがつまってしまうのですよ。白い粉で。お湯にしますからね。3日毎につついてその粉をとらないと、シャワーをあびれない。手間はかかるしもう大変でした」

森山「それは想像しただけでめんどうですね。その仕事は、奥様のお仕事でしたか」

保利「いいえ、それもぼくの仕事でした」

森山・瀬戸（あはは）

保利「日本に帰って来てからね、何とかこの豊かな水をこの後もこの国に保全して行かねばならないと強く思うようになりました。昭和63年ぐらいだったかな。ぼくは水源税というのを考えましてね。計算してみると、フランスでは1.5リットル入りの水が当時100円でした。1トンで約6万円になる。日本の水道は1トンで103円です。水源を守るために1トンの水に1円だけでいいから、税金をかけてなんとかそれを財源に水源を保全していこうと思ったのです」

森山「わたしたちより先に、水の問題に気づいておられたのですね。それで、どうなったのですか」

保利「いやあ、水にたとえ1円であっても税金をかけるなんて許せないという人達が、国会に押しかけて来て、氣勢をあげて大変でした。保利さん、外でまたうるさいからどうかしてくれと、まわりの人達にもんくを言われましたよ」

森山「いやあ、いつの世でも鋭い感性を持った人が先に気づいて声をあげますが、どんな正しいことでも、人々にはすぐに理解されませんね。わたしたちもはじめ、**保水力抜群の最高に豊かな森は、クマたち大型野生動物が造っている**と気づいて、人道上からも森林保全上からもクマを絶滅させるなど訴えたのですが、笑われたり、目をむいて叱られたりでさんざんでした。最近では、やっと10年めにしてわたしたちの主張を理解してくれるロータリークラブの方たちが現れてくださり、ちょっと日の目を見ることができるとかと思って来ましたが、それで、保利さんの提案に反対した人って、どんな人だったのですか」

保利「主婦連の人達がたくさん厚生省に押しかけて反対したり、通産省なんかも工業用水の関係で、水道水に税金をかけるなんて工業振興に反するとかいうことになりましてね。2年間がんばったのですがだめでした」

森山「うーん、今だったらねえ。わたしが主婦連を説得に行きましたよ。水源を保全しよう
と努力しない文明はみんな滅びます」

保利さんが、しんみりとされました。大切なことを必死で訴えたのにわかってもらえなかった無念さを思い出されたのかもかもしれません。なんだか気の毒になってしまいました。政治家として、目の前のことだけでなく国のはるか先のことまで見通して、今何をしておかなければならないか考え、声をあげてがんばった。保利さんのような政治家が、日本にもおられたんだ。わたしたちは、なんだかうれしくてすがすがしい気分になり、歓談が続きました。わたしたちは、熊森のめざしていること、今とりくんでいることを聞いてもらいました。

ちょうどお会いして50分になったとき、保利さんが突然、
保利「森山さん、今から林野庁長官に
会いなさい」と言ってくださいました。



森山「会わせていただけるのですか。そりゃあ、うれしいですが」

保利さんは部屋の電話を使って、林野庁長官の居場所を探してくれました。あちこち電話をかけてくださったけれどあいにく長官はどこにもおられません。保利さんは「長官はどこへ行っているんだ。熊森の森山さんが来られているのだよ」と、電話口で必死に誰かに言っておられました。わたしは内心、熊森の森山なんていわれてもみんな知らないだろうなと思いました。しまいには保利さんが気の毒になって、「今日はもう結構ですから」と言いかけて、でもやっぱりめったに国会など来れないから、保利さんにお任せしたらいいかと思いついて黙りました。ちょうど、林野庁NO2という方がつかまって、急遽、そちらに今から行かせてもらうことになりました。保利さんには、次の会議が始まろうとしていました。

保利「あっそうだ、森山さん、自民党の林政調査会会長に会いなさい。日本の森をどうしていこうか一生懸命考えておられるんだ。兵庫の人だし。谷洋一さんだ」

森山「わかりました。お会いして熊森の話を聞いてもらいます。今日は、ありがとうございました。ところで保利さん、熊森の話を本当によくご理解くださった保利さんに、日本熊森協会の会員になっていただきたいと思います。（こんなあつかましいことを、わたしがいつも言っている訳ではありません。わたしはこのとき、突然思いついたのです。この時、本当に、この議員に会員になっていただきたいとわたしの心が叫んだのです）」

保利「いいですよ。なりましょう」即座でした。ロータリーの方々といっしょだ。

（後程、入会カードが送られて来ました。自治大臣、文部大臣などを歴任され、

自民党議員の中でも人格者として尊敬を集められている方だと、後で知りました）

わたしと瀬戸さんは、慌ただしく次の会に飛び出して行かれた保利さんの後ろ姿に、頭を下げました。そこへ秘書の方が飛び込んで来られて、「今から林野庁にタクシーでご案内するように言われました。どうぞ」私たちは我に返り、あわてて林野庁へ向かいました。